

「主イエスの母、兄弟、姉妹」

2021年12月15日

イエスの母ときょうだいたちが来て外に立ち、人をやってイエスと呼ばせた。時に、群衆がイエスの周りに座っていた。「御覧なさい。お母様と兄弟姉妹がたが外であなたを捜しておられます」と知らされると、イエスは、「私の母、私のきょうだいとは誰か」と答え、周りに座っている人々を見回して言われた。「見なさい。ここに私の母、私のきょうだいがいる。神の御心を行う人は誰でも、私の兄弟、姉妹、また母なのだ。」(マルコ福音書3章31節～34節)

主イエスの家族は、まず、母はマリアで、父はヨセフである。主イエスの降誕とエルサレム神殿での少年イエスの記述は、史実も踏まえているだろうが、神話的に創作された物語である。マリアとヨセフはいいなづけの関係にあった。ところが、結婚前に、マリアは懐妊し、出産した子をイエスと名付けた。聖書は、イエスは聖霊によって身ごもった救い主であると告げている。古代においては、特別な人は、普通でない出産をしたと描く場合が多い。聖霊によるイエスの懐妊も、この文脈にある。結婚前に生まれたイエスは、誰の子か。ヨセフなのか、他の男であるのか。その判断はできない。生まれたイエスを、ヨセフは自分の子として育てた。ヨセフは大工で、主イエスは大工の子と言われている。この大工は石工と木工大工という二説がある。石工は蔑まれた職業で、イエスの出自を石工と低く見なす人がいる。ギリシア語はテクトーンで、木工大工である。「私の軛は負い易く、私の荷は軽いからである(マタイ11:30)」と語っているが、農機具や窓や腰掛などを作る大工であっただろう。聖書では、父ヨセフの記述は途中からなくなり、マリアの息子という表現になっている。ヨセフは若くして亡くなったと想像される。マルコ福音書6章3節に、主イエスの下にヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンと4人の弟がいて、また、名前は書かれていないが、姉妹たちがいたと記されている。7人以上の兄弟、姉妹がいたことになる。するとマリアは、子沢山の寡婦ということになる。主イエスは長男として、父ヨセフ亡き後、弟妹を育てるために、母マリアを懸命に支えたのではないか。責任感のある働き者であったに違いない。弟妹の養育から解かれた30歳頃、ナザレからガリラヤに行き、神の国の宣教活動に入られた。ところが、その宣教は、時代の価値をひっくり返すものであった。「罪人」として社会から放逐された人を社会に復権する癒しを与え、生きることを神の名において肯定する宣教は、民衆の間に絶大な支持が広がった。主イエスの周りには、食事をする暇もないほど、大挙して群がった。宗教家たちは、民衆の主イエスへの尊敬と支持を妬み、また、律法に反するものとして何としても、葬り去りたかった。

主イエスに関わる噂を、家族の者たちは伝え聞いた。そこで、命を狙われ、食事をする暇もないような生活を止めさせ、故郷のナザレに連れ戻し、安全に暮らそうと、母マリアと弟たちがやって来た。家族の願いは当然であろう。ところが、主イエスの周りには人々が押し寄せ、近づくことができないので、人をやって、「御覧さない。お母様と兄弟姉妹がたが外であなたを捜しておられます」と告げさせた。家族の来訪を聞いた主イエスは、『私の母、私のきょうだいとは誰か』と答え、周りに座っている人々を見回して言われた。『見なさい。ここに私のきょうだいがいる。神の御心を行う人は誰でも、私の兄弟、姉妹、また母なのだ』と言われた。肉における家族関係を切り、神の御心を行う者を、私の家族と見なしている。神の国の宣教に立つ主イエスの使命を伝えている。